

アニメで知る心の世界

こもれ心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：天気の子 6回目

空想と反逆とエディプスコンプレックス

今回のテーマ

I. 空想と現実の狭間で生きる登場人物

II. 「ハレ」と「ケ」から天気を読み解く←この途中までやってきた

III. 警察官とエディプスコンプレックス

前回までのまとめ

帆高の物語の出発点

『天気の子』の主人公森島帆高の行動は、『ライ麦畑でつかまえて』のホールデン・コ

ールフィールドと類似している。今までの生活に欺瞞を感じ、そこから抜け出して大都会に理想を求めるといふ物語の始まりは、エディプス・コンプレックスからの逃避であり、儚くも脆く崩れやすいものである。理想としていた都会での一人暮らしは叶わず、帆高は仕方なく須賀への助けを求めることになる。

そこで出会った須賀、夏美との交流をへて、帆高は自分自身を見出していくようになる。

帆高とエディプス葛藤

須賀、夏美との共同生活は帆高にとって人間らしい生き方を取り戻し、大人への成長を遂げていく。これはエディプス葛藤に向き合う重要な準備段階となる。

そこで困窮時に出会った陽菜と再会した帆高は、路地裏のホテルで危険にさらされた彼女を助けようとする。しかし金髪のチンピラに馬乗りになられ、殴打されてしまう。この状況は帆高がこれまで経験してきたエディプス葛藤の再演のように映る。

追い詰められた帆高は拳銃を発砲する。拳銃は「男性性」の象徴であり、この発砲は大人達に立ち向かえる力を獲得したことを示している。しかし、それは社会的に好ましくない形での力の誇示であった。チンピラが怯んだ隙に廃ビルへ逃げ込むが、陽菜は帆高の拳銃使用を責める。これは両者とも社会に背く生き方を良しとしないことへの表れである。その後、帆高が拳銃を投げ捨てたのは暴力的解決を拒絶する誓いの象徴で、この行為により陽菜は心を開き、自分が「晴れ女」であることを明かす。二人は互いにとって希望の光（「ハレ」）の存在となり、晴れビジネスを展開していくことになる。

陽菜の巫女的存在と対幻想

帆高と陽菜が知り合った後、二人は晴れビジネスを展開する。このビジネスは表面的には問題解決への取り組みに見えるが、実際には陽菜が母の喪失という根本的な痛みと向き合うことを避け、周囲の期待に応えることで自分の存在価値を確認しようとする病的な適応だったとも言える。天気をコントロールできるという万能感は、母の死への否認から生まれた躁的防衛であり、その結果陽菜の身体は透明化していく。

天気の巫女は「人の切なる願いを受け止め、空に届けることのできる特別な人間」である。晴れ女である陽菜は、まさにこの巫女的存在であった。『君の名は。』の三葉と同様に、巫女は神を祀り、神に仕え、神意を世俗の人々に伝える役割を担う。

陽菜が晴れ女であり続けることは、巫女としての生き方を選択し、超自然的能力によって東京の天候という共同幻想的要請に応え、最終的には「犠牲」として消失する運命を背負うことを意味する。この状況を変えるには、陽菜を愛し、彼女の苦悩を受け止め、救い出す存在が必要となる。それが帆高である。陽菜と帆高が互いを思い抱く幻想を、吉本隆明

は対幻想と呼んだ。共同幻想と対幻想は逆立するとされるが、精神分析的には自我の目覚めなのである。

凧の提案と帆高の葛藤

陽菜の弟の凧に帆高は陽菜への誕生日プレゼントに関して相談するが、帆高の煮え切らない態度に凧は単刀直切にアドバイスを送っている。それは凧自身が陽菜と帆高に付き合っていて欲しいと考えているが故のアドバイスと考えられる。

陽菜（太陽）と帆高（帆を上げた船）という希望に満ちた航海のイメージに対し、凧という名前は「風が静まる」ことを意味し、一種の「停滞」を暗示している。実際、晴れビジネスを一緒にする中で、陽菜、帆高、凧の3人の関係は非常に活気あふれたものになったが、同時に陽菜は「お姉ちゃん」としての役割に縛られ、帆高との関係も「三人組」の枠内に留まりがちであった。

それでも凧は二人の関係の発展を望んでおり、帆高の陽菜へのプレゼントについて即座に「指輪」と答えた。「指輪」は一般的に永遠の絆、約束の象徴であり、この関係が長く続いて欲しいという凧の願いを表している。そして凧が「姉ちゃんには、もっと青春っぽいことしてほしい」と語ったように、陽菜が自我を持ちイキイキとした生活を送って欲しいという思いを帆高に伝えているように感じられる。

その凧の言葉に後押しされるかのように帆高は指輪を買いにデパートに行く。このとき三葉に帆高が出会うのは象徴的である。『君の名は。』との対比構造として、三葉は既に「巫女的運命」から解放され、凧との対幻想によって自我を取り戻した存在である。一方、帆高はまさにこれから陽菜を「巫女的犠牲」から救おうとしている段階にある。指輪という「結びつき」の象徴を買う場面で、既に救済を成し遂げた三葉と出会うことは、三葉が凧によって救われたように、今度は帆高が陽菜を救う番であることを示している。これは新海誠作品における「救済のリレー」のような構造を呈しているようにも感じられる。

その後、帆高が陽菜にプレゼントをあげようとしたときに陽菜の秘密が語られる。

帆高：陽菜さん

陽菜：帆高（タイミングがぶつかる）

帆高：あ！ごめん

陽菜：あ、ううん なに、帆高？

帆高：いや……別に陽菜さんこそ、なに？

陽菜：あ、うん——

陽菜：——帆高、あのね

陽菜：私——

陽菜の周りに水が舞っている。次の瞬間に突風が吹き、陽菜の傘と上着が飛ばされてしまう

帆高：あっ！

帆高：陽菜さん！！

帆高の目の前には誰もいない。遠方から陽菜の声が聞こえる

陽菜：——帆高っ！！

陽菜は街灯より高い場所に浮いていた。その後しばらくして陽菜の爪先がアスファルトに着くと、そのまま彼女は膝から崩れ落ちてしまう。

陽菜：私が晴れ女になったのはね—— 1年前の、あの日

陽菜：去年、お母さんが亡くなるちょっと前にね—— 私、一人であのビルの屋上に登ったことがあるの。そこはまるで、光の水溜りみたいだった。雲間から一筋だけ陽が差していて、その屋上を照らしてたの。あの廃ビルおん屋上には一面に草花が咲いていて、小鳥がさえずっていて、朱い（あかい）鳥居が陽射しに光っていて

（回想シーン）陽菜が手を合わせながら鳥居をくぐる。彼女が強く祈る中で雨の音が突然消え、彼女が目を開くと彼女は青空の真ん中にいた。そこで陽菜は雲の上の草原、そしてキラキラと煌めきながら泳ぐ空の魚達を見る。

陽菜：気づいたら私は鳥居の下に倒れてて、空は晴れてた。久しぶりの青空だったの。あの時から私はね、空と、繋がっちゃったんだと思う。

【考察】

このシーンで、なぜ陽菜が巫女となったのか精神分析的に考えていきたいと思う。

「あの時から、私は空と繋がっちゃったんだと思う」

この陽菜の発言は深い心理的意味を含んでいると考えられる。

ウィニコットは躁的防衛の特徴の一つとして、「内なる現実の人々を"生きたまま仮死状態"にしておくこと」を挙げている。陽菜の発言はまさにこの状態を象徴している。晴れ女として万能的な存在となった陽菜だが、実際には母の喪失を受け入れられず、彼女の内的世界において良い母（良い対象）と悪い母（悪い対象）の両方を保持したまま、それらを万能的に支配するという躁的防衛の状態に陥っていたと考えられる。

また、吉本隆明の共同幻想論の観点から見ると、巫女となった陽菜は共同幻想（社会が求める「晴れ」への願望）と自己幻想（母の喪失に対する個人的な防衛）を融合させることで、個としての自我の境界を曖昧にしている状態とも言える。この融合こそが、陽菜の自我の消滅を招く危険性を孕んでいるのである。

この万能的支配により、確かに悪い母を制御することは可能となるが、同時に良好な関係性もすべて停止されてしまう。その結果、陽菜自身の内面が死滅してしまうことになり、これは前述の通り自我の消滅を意味するものである。

陽菜はそのように巫女になることで、「ハレ」を自身で制御するという万能的支配を持つようとし続けたのだと考えられる。しかし、それは先に述べたように自我の消滅である。

その陽菜を助け出すには、前述の「君の名は。」で瀧が深く三葉の内面に入り込む中で三葉を救い出したように、帆高が陽菜を愛し、彼女の苦悩を受け止め、彼女を救い出すことが不可欠なのである。

6) 刑事たちの追求と「ケ」

その後、陽菜の家に刑事と女性警官が訪れ、帆高がいないかと事情聴取される。そしてここに保護者がおらず、子ども達だけで生活しているのは問題だと指摘され、後日児童相談所の介入が入ることとなり、これまでの生活が大人達によって壊されることになってしまう。警官は父の象徴であり、超自我対象である。ある意味、彼らは帆高達にこれまでの夢の出来事から別れを告げ、現実と向き合えと言っているように感じられる。

しかし帆高達3人は逃避行をすることにする。それはまさにキャッチャー・イン・ザ・ライの主人公ホールデン・コールフィールドの逃避行のようである。途中夏にも関わらず、大雪が降り、交通機関が大きく乱れ、警察に補導されかけるも命からがら逃げ出し、どうにか場末のラブホテルに泊まることができた。そこで3人はカラオケに興じたり、枕投げをしたりと束の間の楽しい時間を過ごす。

そのなかで帆高は思う。

——もしも神さまがいるならば、

お願いします。もう十分です。もう大丈夫です。僕たちは、なんとかやっていけます。

だから、これ以上僕たちになにも足さず、僕たちからなにも引かないでください。
神様、どうか、どうか。僕たちを、もうすこしだけこのままでいさせてください。

そのように帆高が祈るということは、このひとときは長くは続かないということに気がついているのだろう。

その後、0時を過ぎて、陽菜の誕生日になった時に陽菜と帆高で取り交わされた会話を取り上げる。

帆高：陽菜さん、十八歳のお誕生日、おめでとう。安物だけど、陽菜さんに似合いそうなのを探したんだ

陽菜：ありがとう……！　ねえ、帆高はさ、この雨が止んでほしいって思う？

帆高：え？　——うん

陽菜：人柱なんだって、私

帆高：……え？

陽菜：夏美さんが教えてくれたの。晴れ女の運命。晴れ女が犠牲になってこの世から消えることで、狂った天気は元に戻るんだって

帆高：え……まさか……いや、あの人たちの話っていつもすげえ適当だし……まさかそんな……消える？　そんなわけ——

陽菜がバスローブを抜いていくと彼女は半身は透明になっていた。

陽菜：……帆高。どこ見てんのよ？

帆高：どこも見て——！——陽菜さんを見てる……

帆高は泣きそうになりながら言う。

陽菜：……どうして君が泣くかな……。最初はなんともなかったの。でもある時気づいたの。晴れを願うほどね、体が透明になってくの。…このまま私が死んじゃったらさ……きっと、いつもの夏が戻ってくるよ。風をよろしくね。

帆高：イヤだ！！だめだよ、陽菜さんはいなくならない！　僕たちは三人で暮らすんだ！

陽菜：帆高……。

帆高：陽菜さん、約束しようよ。俺が働くから！　ちゃんと生活できるくらい、しっかり稼ぐから！　もう晴れ女をやめたんだから、体だってすぐに元に戻るよ！

泣き出す帆高を陽菜は抱きしめ、お互い強く抱きしめ合う。

【考察】

このやりとりから陽菜は、晴れを願うほど体が透明になっていく異変に気がつき、天気
の巫女は人柱になるという言い伝えを受け入れ、覚悟し、人々の願い（巫女が生贄となり
晴れるという共同幻想）に融合する形で、自分自身が消失していく（いわば自我の消失）
ことを受け入れようとしているように感じられる。一方で帆高はそのことを自分のことの
ように嘆き悲しみ、なんとかこの状況を避けようと必死にもがいている。その二人の様子
が対照的である。陽菜は何か悟っているかのようであるが、帆高は嘆き悲しみ、必死にど
うにかしようともがいている。しかしこの帆高の思いも陽菜も思いであり、帆高の思いは
陽菜自身の受け入れられない（彼女の悟りの裏側にある悲しみ）感情の投影のように感じ
られる。

それだからなのかもしれないが、帆高自身の心の成長が感じられる。この会話の中で帆
高は陽菜という存在が自分にとってかけがえのない存在であり、一緒に生活を築き上げて
いこうという強い主体性を感じる。

そしてその後、帆高と陽菜が見た夢が非常に意義深い。帆高は夢の中で「この場所から
出たくて、あの光に入りたくて」と言っていたように、帆高は、エディプス葛藤に押しつ
ぶされ、今ある状況から逃げ出し、大人のように自立した生活を望むが、孤独や不安を抱
え、主体的になれないでいた。そこで陽菜に出会い、愛すべき対象を見出し始めたが、夢
が途中で終わってしまったということは、それはまだ道半ばということを意味している
のだろう。

陽菜は帆高に出会った頃からのことを回想した夢を見たが、風俗バイトに手を染めよう
としたときに、小説版では「君に会えて、本当に幸せだった。もし君に会えていなかった
としたら、私は今ほど、私自身も世界も愛せていなかった。」というように、陽菜にとっ
て、帆高は生きる希望であり、心の支えだった。しかし陽菜は消えて、空の上に行ってし
まう。そして空の上の世界に行った陽菜は帆高にもう会えなくなるかもしれないと考え、
嘆き悲しんでしまう。

ここから帆高が陽菜を助け出す話へと展開していくが、ここが『君の名は。』で三葉の
住む糸守町が隕石の落下で消滅し、そのことを知った瀧が、三葉を救い出すために宮水神
社の御神体へと一人で向かう展開と似ているものを感じる。

その後、刑事がそのホテルに乗り込み風は児童相談所に帆高は警察署に送られることになる。しかし帆高は警察署から逃げ出し、逃走劇を繰り広げていく。